

# 母親のしつけパターンと保育園における子どもの情緒的な行動傾向との関連

岩 崎 桂 子

## A Relationship between the Child-raising Pattern of Mothers and the Tendency of Emotional Activities of the Children in Nursery School

*IWASAKI Keiko*

キーワード：母親のしつけパターン、情緒的な行動傾向、集団生活

### I. 問題と目的

保育所は、児童福祉法に基づき保育に欠ける乳幼児を保育することを目的とする児童福祉施設である<sup>注1)</sup>。近年、働く母親の増加とともに、保育所に子どもを長時間預ける家庭が増えてきている。保育に欠ける乳幼児を保育する上で子どもの特性、性格、家庭環境の把握は、保育方法・内容の検討、保育の円滑化を図る上で重要な情報になる。

しかし、保育者の交代勤務や子どもの保育時間、親の仕事上の都合等により担任保育士と保護者がゆっくり時間を取り、子どもの生活について相談を受ける時間は極めて少ないのが現状である。

また、保育者に求められる役割も日々変化し、保育所では、園に通う親子だけではなく、地域の子育て支援活動の一環として、園庭開放や子育て相談、一時預かりなどが展開され、子育てにおける専門職としての重要性が高まっている。このように、現在の保育者には、入園児の保育以外にも多様な職務が課せられている。そのため、保育者は専門性を高めるためにも、保育所保育指針にもあるように研修等を行いより良い保育を追求し、保育者間での情報交換を行い問題解決に努めている。

一方で、保育所などで集団生活を送る子どもたちに生起する問題は、子どもが生来持っていると思われる特性や性格のみが原因ではなく、その子どもの家庭環境、生活環境などが関係していると思われる。このことを、環境との相互作用と捉え、特にその環境の主要人物である母親に重点を置き、本研究を進めることとする。

ではなぜ、保育所などで、集団生活を送る中で、友達に乱暴したり、誰かに頼ろうとする気持ちが強い子どもがいるのだろうか。それには、さまざまな原因が考えられるが、特に家庭での母親の養育態度と何らかの関係があり、母子の相互交渉の在り方が、子どものその後の発達や行動に影響を及ぼしている<sup>注2)</sup>と考えられる。

また、集団への不適応を起こしている幼児の中には、母親の子どもへの接し方に何らかの問題があり、その母親の行動に影響されて集団不適応に陥ってるケースもある<sup>注3)</sup>とされている。

以上の事から、本研究では子どもが集団生活の中で示す攻撃性、依存性などの性格・行動傾向を情緒的な行動傾向として提示し、次のような仮説を設定して、それを検証することを目的とする。

仮説Ⅰ. 子どもの情緒的な行動傾向と母親のしつけパターンには関連性があるのではないか。

仮説Ⅱ. さらに、その母親のしつけパターンは、母親自身の幼児期の、養育体験イメージと何か関係があるのではないか。

子どもが集団生活を送る中で示す情緒的な行動傾向には、母親の子どもへの接し方に何らかのパターンがあり、例えば受容的であったり、指導的であったりする母親のしつけパターンが影響することにより、それが子どもの情緒的な行動傾向として表現されていることが多いのではないかと考えられる。さらに、母親のしつけパターンの中に示される養育行動は、子どもの行動のモデルになっている<sup>注4)</sup>可能性があると考えられている。また、母親のしつけパターンは、母親自身の幼児期の養育体験がどのようなものであったかに関係しており、その体験をどう捉えているか、どう感じているかというイメージが母親のしつけ行動として表現されているのではないかと考えられる。

本研究を行うことで、子どもの問題に保育面で対応しようとする場合も、保護者と共に取り組んで行こうとする場合も、子ども自身の特性にのみ原因を帰する態度では問題の解決には至らないことが多く、さまざまな視点、関係からの改善に向けてのアプローチが有効である<sup>注5)</sup>という報告を支持することになると考えられる。

保育士の専門性が強く求められている今日こそ、母親のしつけパターンと子どもの情緒的な行動傾向との関連について考察することで、子どもの情緒的行動傾向に対する保育現場での問題解決に向けた手がかりにするとともに、母子をどのように援助し、対応すべきかを考えていく上での参考になると考えられる。

## II. 方法

### 1. 調査の概要

調査対象者：都内保育所1カ所、全児童174人中、情緒的な行動傾向の強い56人の子ども。年齢は1歳児7名、2歳児12名、3歳児14名、4歳児10名、5歳児11名、6歳児2名である。

### 2. 調査方法

調査日：1999年7月上旬である。回収期日は

約2週間程度とした。質問紙は各クラス担任を通して保護者に配布する。

調査方法：保育所の各クラス担任に日常の保育活動の中で情緒的な行動傾向が、他の子どもよりも強く表れている子どもを選んでもらい、子どもの性格・行動質問紙を実施してもらう。

情緒的な行動傾向が強いとは、本研究では、年齢の割に友達とうまくつきあうことができない、他の子どもに比べて発達が遅い、クラスの中で落ち着かない、などの行動を示すことを言う。ここでは、保育者が保育を行う上で困難を感じていることを規準として判断することとした。

また、児童全員の保護者に、子どもの発達状況の調査として、しつけパターンの質問紙を実施する。さらに養育体験のチェックリストを同時に実施し、情緒的な行動傾向が強い子どもとその保護者に対し、母親のしつけパターン尺度、子どもの性格・行動質問紙、母親の養育体験チェックリストの3種類の質問紙の結果を比較して、相関を行う。

#### (1) 母親のしつけパターン尺度について

下山剛(1982)<sup>注6)</sup>より作成されたものを用いた。項目数は22項目である。

22項目は、その後の西野泰広らの研究<sup>注2)</sup>によって以下の6要因に分類された。

①受容性：関係する項目はNo.1、No.2、No.3、(受容-拒否)No.4、である。

子どもを認め受容するパターンである。

子どものしつけ方というより子どもに対する基本的な愛情の程度を表現している。この逆が拒否傾向で、子どもに対して冷たい態度を意味する。受容されている子どもは情緒的

に安定でき、物事に対しても積極的に行動できると考えられる。逆に拒否されている子どもは、情緒的に不安定になり、物事に対して消極的になりやすい傾向となる。得点が高いほど受容的な傾向であることを示している。

- ②指導性：関係する項目はNo.5、No.6、No.7、  
(指導—放任) No.8、No.9、である。

子どもに対して、親として必要な指導（注意、指示、援助）を行う、しつけパターンである。

子どもがなすべきことをきちんと行うように注意や指導をすることが中心となり、子どものやる気を育てる上で必要な指導であると考えられる。得点が高いほど指導を行う傾向を示している。

- ③意欲促進：関係する項目はNo.10、No.11、No.12、  
(意欲—無気力) No.13、No.14、である。

子どもに有能感や成功感を与え、失敗を恐れないよう、また努力するように日ごろから励まして、子どものやる気を強めるしつけパターンである。この逆は、子どもの失敗感を強め、劣等感を育てて、やる気を阻害するしつけパターンと考えられる。得点が高いほど意欲促進のしつけ傾向を示している。

- ④放任：関係する項目はNo.15、No.16、No.17、  
(指導—放任) である。

無視や養育拒否という養育態度であり、ほったらかしにするしつけパターンである。

この逆は過干渉、過保護と考えられる。その意味で、注意や指示、援助をほとんど行わないしつけパターンである。得点が高いほど放任の傾向を示している。

- ⑤賞賛型：関係する項目はNo.18、No.19、No.20、

(賞賛—

非応答的) 子どもをほめることで自信をつけさせ、自発性や自立心を尊重し、それらを育てるしつけパターンである。得点が高いほど賞賛型の傾向を示している。

- ⑥叱責型：関係する項目はNo.21、No.22、であ  
(叱責—放任) る。

子ども自身のそれなりのプロセスを重視しない教え込みの厳しいしつけパターンである。親の感情が優先していると考えられる。得点が高いほど叱責型の傾向を示している。

質問紙を作成するにあたって、以上の6因子と関係のない項目を削除し、回答しやすいようにして、回収率を高めた。

回答方法は「あてはまる」を2点、「ときどきあてはまる」を1点、「あてはまらない」を0点として得点化した。

以上の質問紙に説明と記入方法を提示し、保護者全員に回答してもらうよう、保育所に依頼した。

## (2) 子どもの性格・行動の質問紙について

望月武子の作成したもの(1974)<sup>注7)</sup>を用いた。項目数は33項目である。33項目は望月らの因子分析の結果、以下のような11の因子に分類される。

- ①顕示性：関係する項目はNo.1、No.2、No.3、である。

子どもが思っていること、考えていることをはっきりと意思表示することであり、保育者や母親の注意を引こうとする傾向のことである。得点が高いほどこの行動傾向が強いことを表している。

- ②神経質：関係する項目はNo.4、No.5、No.6、である。

過敏になり、繊細であり、気にしなくてもよいような細かいことまで気にする傾向のことである。得点が高

いほど神経質であることを示す。

- ③不安傾向：関係する項目はNo.7、No.8、No.9、である。

母親や保育者がいないと落ち着きが無くなったり、場所が変わるとソワソワするなど消極的になりやすい行動傾向のことである。得点が高いほど不安傾向であることを示す。

- ④自制力の欠如：関係する項目はNo.10、No.11、No.12、である。

母親や保育者に対し、自分の気持ちや欲求を過度に表す傾向のことである。逆に自制力のある場合は保育しやすい傾向の子どもと考えられる。得点が高いほど自制できない傾向を示す。

- ⑤依存性：関係する項目はNo.13、No.14、No.15、である。

人に過度に頼り、出来ないことがあるとすぐに大人に頼る傾向のことである。注意を引く、相手を試すような行動傾向のことである。得点が高いほど依存する傾向を示す。

- ⑥退行性：関係する項目はNo.16、No.17、No.18、である。

甘えたり、世話をしてもらいたいという行動傾向のことである。具体的には、泣く、甘えるなどの行動で、自分の存在をアピールすることを示している。得点が高いほど退行的であることを示す。

- ⑦攻撃性：関係する項目はNo.19、No.20、No.21、である。

すぐ怒ったり、暴れたりする行動傾向のことである。情緒不安定の強い場合も含める。得点が高いほど攻撃的である傾向を示す。

- ⑧社会性の欠如：関係する項目はNo.22、No.23、No.24、である。

集団生活を送る中で重要な約束や決

まりごとを守る行動傾向が欠如していることを示す。得点が高いほど、社会性の欠如傾向が高いことを示している。

- ⑨家族、保育者：関係する項目はNo.25、No.26、No.27、への不適応 である。

家族や保育者などに対して、さまざまな場面で適応できない傾向のことである。得点が高いほど不適応傾向であることを示している。

- ⑩集団生活：関係する項目はNo.28、No.29、No.30、への不適応 である。

集団生活におけるカリキュラムや行事に適応できない傾向を表す。得点が高いほど集団に適応できない行動傾向が強いことを表す。

- ⑪体質傾向：関係する項目はNo.31、No.32、No.33、である。

子どもの持つ体質が、集団生活において問題視される傾向のことを表す。得点が高いほど、この傾向が強いことを示している。

これらの質問項目に対して、「あてはまる」を2点、「ときどきあてはまる」を1点、「あてはまらない」を0点とした。

この質問紙は各クラス担任に、日常の保育活動の中で情緒的な行動傾向が強い子どもを選び出し、それぞれ回答してもらうこととした。

### (3) 養育体験チェックリスト

詫摩武俊の作成したもの(1984)<sup>註8)</sup>を用いた。

これは、母親自身の幼児期の養育体験イメージ、特に幸福度をチェックするものである。したがって母親の今の状況が不幸かどうか見るものではない。回答方法は「はい」、「いいえ」の25項目からなり「はい」を1点として評定した。

この質問紙は、母親の幼児期の記憶が、現在のしつけパターンに影響があるのかを見るため、母親全員に回答してもらうよう依頼した。

また、全体の平均をとり、上位、つまり、幸福

と感じている母親5名と、下位、つまり、あまり幸福と感じていない母親5名を抽出した。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 各尺度得点の分布

##### (1) 母親のしつけパターン尺度

母親のしつけパターン尺度により、調査を行い、各要因の結果は図1のとおりとなった。受容性は標準偏差1.39、平均4.0である。指導性は標準偏差1.18、平均5.1で低い点に偏りがみられた。意欲促進は、標準偏差1.16、平均6.7である。放任は標準偏差0.98、平均1.7でやや低い点に偏る傾向がみられた。賞賛型は、標準偏差1.09、平

均5.1で高い点に偏る傾向がみられた。叱責型は、標準偏差1.21、平均1.1で低い点に偏る傾向がみられた。

##### (2) 子どもの性格・行動傾向質問紙

子どもの性格・行動の質問紙から、調査を行った結果、各要因の結果は図2のとおりになった。顕示性は、標準偏差2.12、平均1.8であり、低い点に偏る傾向がみられた。神経質は標準偏差1.25、平均1.3であり、低い点に偏る傾向がみられた。不安傾向は、標準偏差2.00、平均2.8であり、全体にちらばる傾向がみられた。自制力の欠如は標準偏差1.88、平均1.8であり、低い点に偏る傾向がみられた。依存性は、標準偏差1.71、平

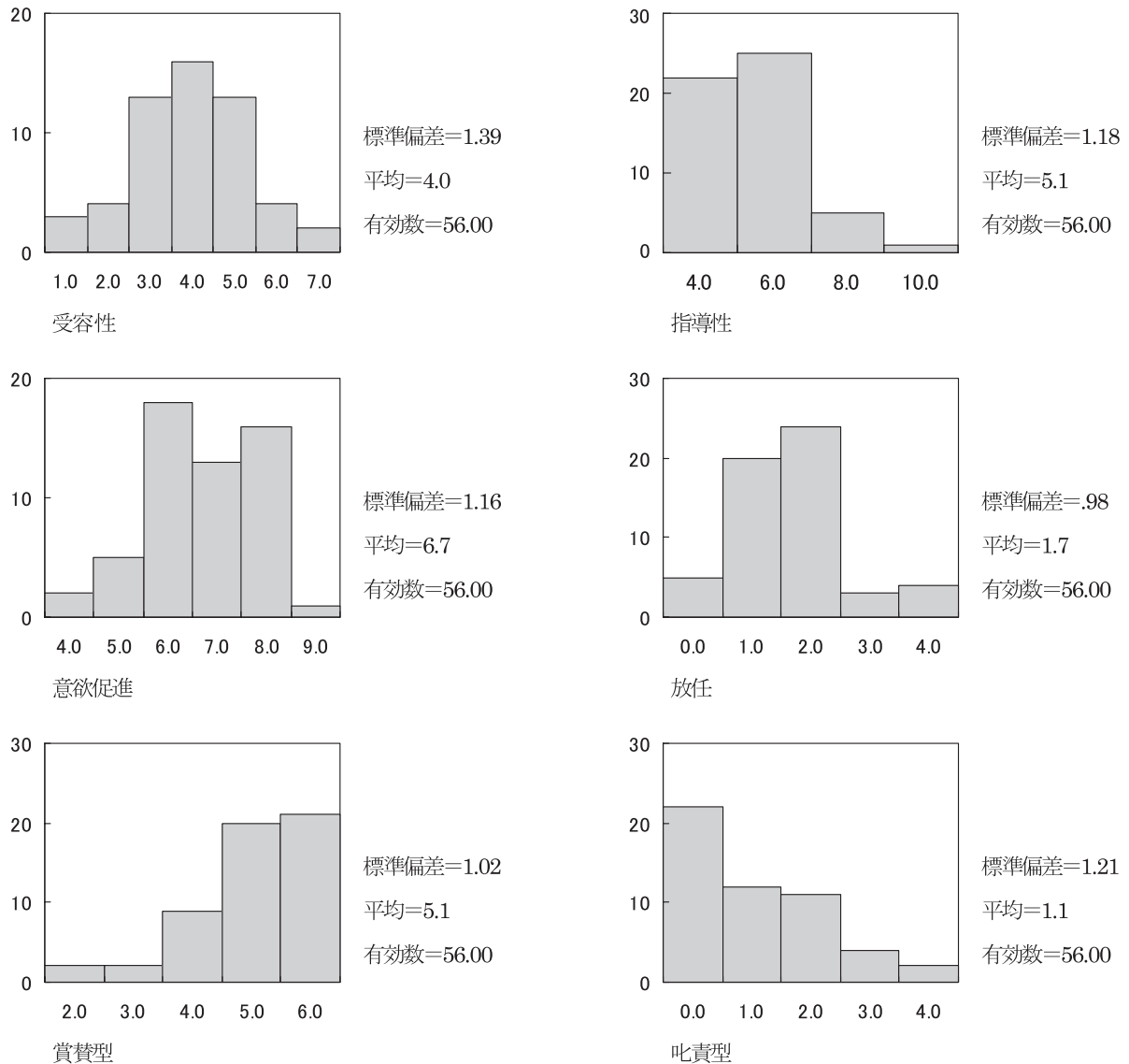


図1 母親のしつけパターン尺度の度数分布

均 2.0 であり、やや低い点に偏る傾向がみられた。退行性は、標準偏差 1.92、平均 2.4 である。攻撃性は、標準偏差 1.71、平均 1.7 であり、低い点に偏る傾向がみられた。社会性は、標準偏差 1.99、平均 2.2 である。家族・保育者への不適応は、標

準偏差 1.57、平均 2.0 であり、低い点に偏る傾向がみられた。集団生活への不適応は、標準偏差 1.03、平均 1.3 であり、低い点に偏る傾向がみられた。体質傾向は、標準偏差 1.24、平均 0.9 であり、低い点に偏る傾向がみられた。

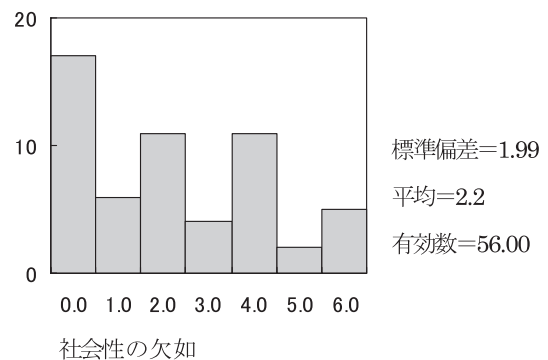
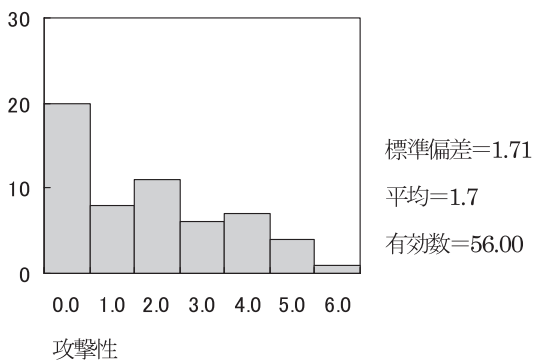
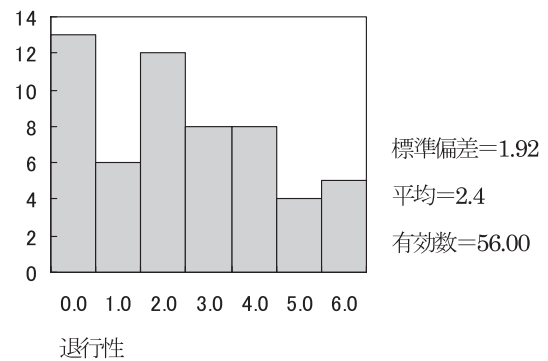
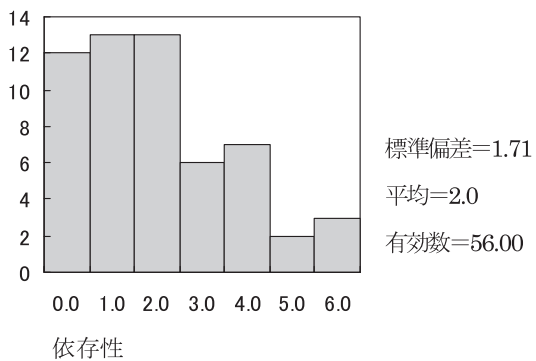
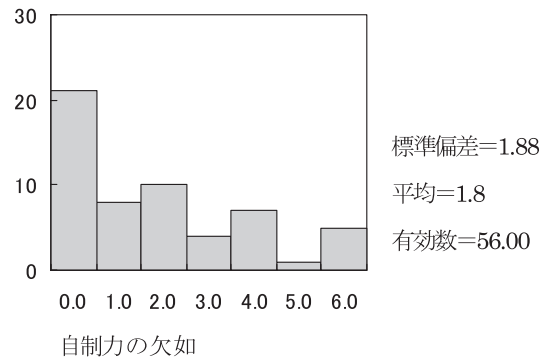
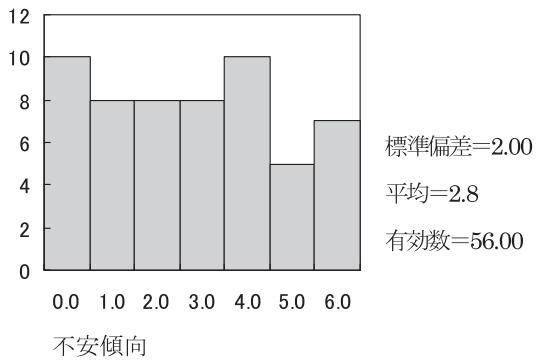
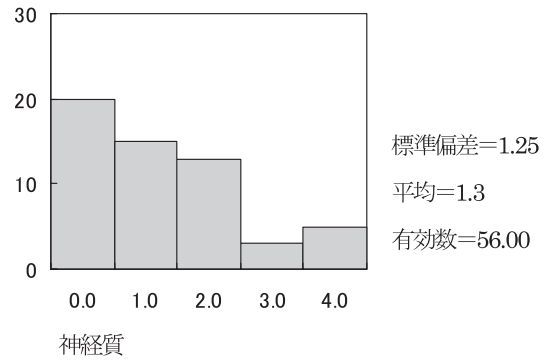
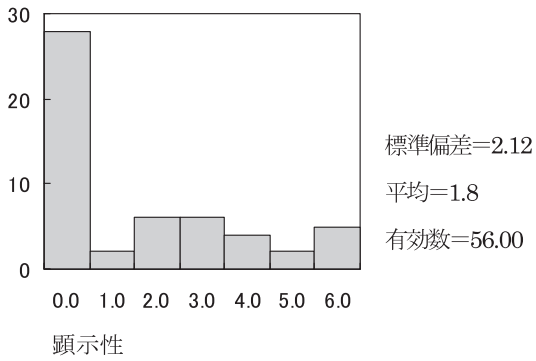


図2 子どもの性格・行動の度数分布

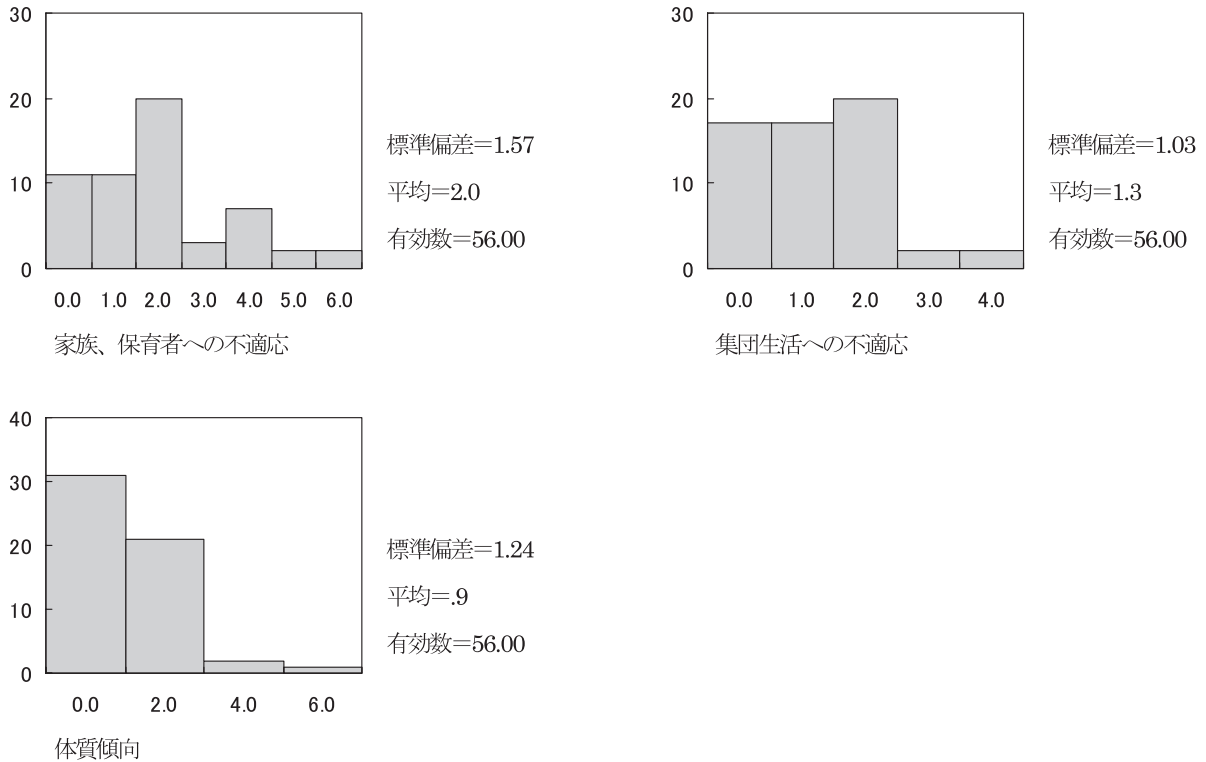


図2 子どもの性格・行動の度数分布 (つづき)

### (3) 養育体験チェックリスト

母親に対する養育体験チェックリストから、養育体験の幸福度の結果は図3のとおりである。

標準偏差は5.31、平均15.8であり、ほぼ正規分布している。平均より得点の低い母親は30人であり、特に得点の低い母親は5人である。

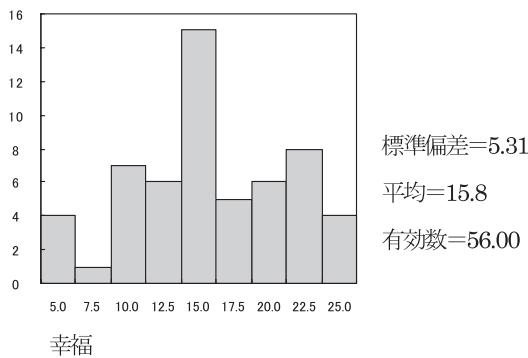


図3 養育体験幸福度チェックリストの度数分布

## 2. 母親のしつけパターンと、子どもの性格・行動傾向の相関

資料1、資料2の質問紙により、相関係数を求めた結果、表1のとおりになった。叱責型と依存性は5%水準で有意な相関、指導性と攻撃性は5%水準で有意な相関、また、賞賛型と集団生活へ

の不適応は5%水準で負の相関が得られた。

## 3. 母親のしつけパターンと養育体験チェックリストの相関

表1の母親のしつけパターンと、子供の性格・行動傾向の相関結果を踏まえ、資料3の質問紙より合計点数から上位5名、下位5名を抽出し、母親のしつけパターンと養育体験チェックリストとの相関を求めた結果、表2、表3のとおりになった。上位5名は、意欲促進のしつけパターンと1.00の高い相関があり、下位5名は賞賛型と5%水準で-.952の相関がみられた。また、有意ではないが、上位・下位を問わず放任との関連も若干みられた。

## IV. 考察

### 仮説Iについて

表1から叱責型の母親のしつけパターンでは、子どもの行動傾向の依存性との関連が強く表われているという結果が得られた。叱責型とは、子どものそれなりのプロセスを重視しない、教え込み

表1 各要因との相関係数

	受容性	指導性	意欲促進	放任	賞賛型	叱責型
顕示性	.195	.056	.043	.075	.090	.246
神経質	.065	.028	.056	.115	-.253	-.143
不安傾向	-.164	-.087	-.134	-.106	.069	-.106
自制力の欠如	.019	.088	-.093	.135	-.070	.167
依存性	.000	-.225	.122	-.062	-.105	.332*
退行性	.023	-.026	-.051	.050	.035	.238
攻撃性	.074	.322*	.057	.173	-.086	.150
社会性の欠如	-.077	-.090	.022	-.102	-.015	.002
家族、保育者への不適応	.108	.167	-.066	.158	-.226	.165
集団生活への不適応	.023	.153	-.114	.104	-.273*	.073
体質傾向	-.075	-.019	.144	.034	.136	.074

\*相関係数は5%水準で有意（両側）です。

表2 養育体験チェックリスト上位5名と母親のしつけパターン尺度の相関係数

	受容性	指導性	意欲促進	放任	賞賛型	叱責型
幸福	.395	.514	1.000*	.612	.250	-.196

\*相関係数は1%水準で有意（両側）です。

表3 養育体験チェックリスト下位5名と母親のしつけパターン尺度の相関係数

	受容性	指導性	意欲促進	放任	賞賛型	叱責型
幸福	.159	.362	-.389	.648	-.952*	-.040

\*相関係数は5%水準で有意（両側）です。

の厳しいしつけパターンである。依存性とは、人に過度に頼り、できないことがあるとすぐ大人に頼る傾向のことである。したがって、教え込みの厳しいしつけパターンでは、子どもは大人を過度に頼り、大人の注意を引く、相手を試すような情緒的な行動傾向が増える傾向が見られると考えられる。母親のしつけパターンの中には、母親の感情や行動を優先した厳しいしつけパターンをとる事例がしばしば見られるが、このようなしつけパターンの場合、母親のしつけに一貫性がなく、時と場合によって態度が変わるため、子どもが委縮してしまい子どもは常に大人の顔色を窺う行動を取るのではないかと考えられる。

次に、表1から、指導性の強い母親のしつけパターンでは、攻撃性との行動傾向で、正の相関が得られた。指導性とは、子どもに対して強い態度で注意・指示・度がすぎる援助を行うしつけパターンである。攻撃性とは、すぐ怒ったり暴れたりする行動傾向のことである。このことから、子どもに干渉しすぎて、指示や注意が多くなるしつけパターンでは、子どもが怒りっぽく、他の子どもに対し攻撃的になる傾向があると考えられる。母

親から常に行動を注意されている子どもは、保育所などで母親から離れた際に激しい自己主張をするのではないかと考えられる。金子智栄子たちの先行研究（1997）<sup>注8)</sup>に過干渉な親の態度は子どもをわがままにする、という結果とも関連があると考えられる。

また、表1から、賞賛型の母親のしつけパターンと集団生活への不適応の子どもの行動傾向の間には負の相関が得られた。賞賛型は、子どもを褒めることで自信をつけさせるしつけパターンである。また、集団生活への不適応は、集団生活のカリキュラムや行事に対応できない傾向のことをいう。これらは、負の相関であるため、子どもを褒めるしつけパターンは、集団生活への適応を促す傾向にあると考えられる。子どもは、母親から褒められることで、行動に自信を持ち、情緒的に安定した生活を送ることができるのだろう。

以上のことから、母親のしつけパターンと子どもの情緒的な行動傾向との関連は、賞賛—非応答的というしつけパターンが子どもの情緒的な行動傾向と関連すること、過度な指導・注意は子どもの攻撃性を増す傾向があるということが理解でき



る。母子の相互交渉の在り方が、子どものその後の発達に影響を及ぼしているという先行研究とほぼ同じことが言え、西野泰広たちの先行研究（1987・1990）<sup>注2）、10）</sup>を裏づける結果となった。この結果から、仮説Ⅰは成り立つといえるだろう。

#### 仮説Ⅱについて

養育体験チェックリストから下位5名を抽出し、母親のしつけパターン尺度との相関を求めた。表3から、母親自身の幼児期の養育体験イメージがあまり幸福と感じていない母親は、賞賛型と5%水準で負の相関がみられた。つまり、負の相関ということは、幼児期の養育体験イメージがあまり幸福と感じていない母親は、子どもを褒めることで自信をつけさせることをあまりしないしつけパターンをとる傾向がみられると考えられる。養育体験イメージがあまり幸福と感じていない母親の子どもは、表1の結果にあるように子どもが集団生活への不適応の傾向にあるという結果につながっている。また、表2から、母親自身の幼児期の養育体験イメージが幸福と強く感じている母親は、意欲促進、つまり、子どもを日ごろから励まして、やる気を強めるしつけパターンをとる傾向があると考えられる。表1から、有意な数値ではないが意欲促進のしつけパターンと集団生活への不適応で負の相関がみられる。これは、幼児期の養育体験イメージが幸福だと感じている母親の子どもは集団生活に適應できているといえるだろう。この結果から、子どもを褒めて、意欲を引き出させるような親子関係を築けるように働きかけると子どもは集団生活に適應できるようになると考えられる。

以上のことから、子どもが集団生活への不適応を起こしている場合、母親の幼児期の養育体験イメージとの関連があることが考えられる。今回の調査では、母親のしつけパターンと母親自身の幼児期の養育体験イメージが肯定的であるか否定的であるかは関連があると考えられ、仮説Ⅱも成り立つと言えよう。さらに、仮説Ⅰと仮説Ⅱの関連性があることが立証されたと言えよう。

## V. 終りに

今回の研究では、母親のしつけパターンと子どもの情緒的な行動傾向の関連を調べ、さらに、母親のしつけパターンと母親自身の幼児期の養育体験イメージの関連を調べた。その結果から、しつけパターンと子どもの情緒的な行動傾向は関連があることが理解できた。しかし、子どもの情緒的な行動傾向に影響しているのは、母親のしつけパターンだけとは言えないと考えられる。この結果は、冒頭で述べたように、子どもの発達には、母親からの影響だけではなく、その他の環境要因が影響しているということを示していると考えられる。子どもが所属する集団の影響や、父親の影響も考えられる。また、保育者のこれまでのアプローチなども関係してくるだろう。今後もさらに多面的に調査する必要があると考えられる。

また、母親のしつけパターンと、母親自身の養育体験との関係では、肯定的なイメージを持つ母親は子どもの積極性を引き出す働きかけが多く、否定的なイメージを持つ母親は、子どもを褒めない傾向にあることが明らかになった。そこには、母親の養育体験の世代間伝達などが、関係していると考えられる。また、母親自身の養育体験が否定的なイメージを持つ母親に対して、保育者として子どもを褒めるように働きかけ、子どもの意欲を引き出すような関係を築けるように手助けをする必要があると考えられる。そのことにより、母親自身の幼児期の養育体験イメージが否定的であっても子どもの問題行動への関連は少なくなると思われる。そのために、保育者として子どもの出来た事、出来ることを母親に伝え、今まで母親が見えなかった子どもの側面に目を向けるように促していくことが重要ではないだろうか。子どもの良い面が見えてきて、褒めてやる気を伸ばすことができるように母親をサポートしていくことが、今日の保育者に求められている。

これらの結果は、保育者として、長時間子どもを預かる際の保育方法・内容の見直し、専門職と

しての質の向上に役立つと考えられる。

今後の課題としては、母親だけにとどまらず、父親の養育態度と子どもの情緒的な行動傾向の関連や、両親を合わせての考察をすすめ、現代の乳幼児を持つ養育態度とそれを取り巻く環境との問題を浮き彫りにするとともに、その解決策についての研究が必要になると考えられる。しかしながら、このためにはかなりのデータ数があることを考慮しなくてはならない。ましてや、情緒的な行動傾向といった高次の心的行動を扱う場合には、要因数も増やし、定量的に把握する必要があると考えられる。

## 注

- 1) 「保育所保育指針」厚生労働省 2007年3月告示
- 2) 西野泰広「幼児期の母親のしつけパターン—自己教育的しつけ尺度の開発—」『豊橋短期大学研究紀要』第4号, 1987年, P.73
- 3) 戸ヶ崎泰子・坂野雄二「母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応に及ぼす影響」『教育心理学研究』第45巻第2号, 日本教育心理学会, 1997年, P.57
- 4) 前掲, 戸ヶ崎泰子・坂野雄二「母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応に及ぼす影響」, P.56
- 5) 義永睦子「子どもの問題についての保育者間の相互理解」『武蔵野大学人間関係学部紀要』第4号, 2007年, P.63
- 6) 下山剛「子どものやる気を育てる10則」サンマーク出版, 1982年
- 7) 望月武子「母親の育児態度の推移」『日本総合愛育研究所紀要』第10集, 1974年
- 8) 詫摩武俊「子どもを伸ばす上手なほめ方叱り方」PHP研究所, 1991年10月
- 9) 金子智栄子・吉田公子・倉橋宏子・滋野志津子「保育園での幼児のトラブルに関する研究—母親の養育態度や子どもの社会性の発達との関連性—」『母子研究』18号
- 10) 西野泰広「幼児の自己抑制機能と母親のしつけタイプ」『発達心理学研究』第1巻第1号, 発達心理学会, 1990年

## 参考文献

- 1) 高橋種昭他「乳児の養育における母性意識の構造に関する研究」『日本総合愛育研究所紀要』第11集, 1976年
- 2) 高野卓郎「幼児をもつ親の養育態度に関する研究Ⅱ—特に母親の養育態度を中心とした—」『比治山女子短期大学紀要』通号26, 1992年
- 3) 柏原栄子「保育所における母子関係の一考察」『聖和大学論集』第9号, 1981年
- 4) 望月武子・野田幸江「保育所における長時間保育実施上の諸条件に関する研究」『日本総合愛育研究所紀要』第11集, 1976年
- 5) 竹石聖子「保育者の「子どもの問題」を捉える視点についての考察—保育実践における保育者と子どものかかわりに着目して—」『常葉学園短期大学紀要』第38号, 2007年
- 6) 平井純子「幼児の社会的ルールを理解—養育者のしつけ観との関連について—」『奈良女子大学教育学科年報』第10号, 1992年
- 7) 西野泰広・大野元三・岩田弘行「幼児画と自己制御機能と母親のしつけとの関連」『豊橋短期大学紀要』第7号, 1990年
- 8) 金子元春・金山佐喜子「幼児用問題行動尺度(保育者評定版)の妥当性の検討—内的適応に関する指標との関係—」『国際幼児教育研究』Vol.15, 2008年

資料1 母親のしつけパターン尺度

子どもの日頃の行動、様子について観察している部分について下記の22項目にあわせて答えてください。項目の内容にあてはまる場合は○印を、ときどきあてはまる場合は△印、あてはまらない場合は×印を [ ] 内に記入してください。

- (1) 子どもが何かしくじったり失敗したとき、つかっとなって叱ってしまう。 [ ]
- (2) 子どもが友達にいじわるされて、メソメソしている時、慰めてあげる。 [ ]
- (3) 子どもが友達を家に連れてくるのはあまり歓迎できない。 [ ]
- (4) 子どもを叱るときつい感情的になったり叩いたりしてしまうことが多い。 [ ]
- (5) 子どもがやるべき事をやらないで、テレビやマンガに夢中になってもあまり注意しない。 [ ]
- (6) 子どもがお客様にきちんと挨拶しない場合注意して挨拶させる。 [ ]
- (7) 子どものことは子どもに任せていっさい口を出さない。 [ ]
- (8) 子どもがわからないことを聞きにできればできるだけ教えてあげるようにしている。 [ ]
- (9) 子どもが下品な言葉や悪い言葉を使ってもあんまり気にならない。 [ ]
- (10) 子どものできが悪いのは頭が悪いからだときらめいている。 [ ]
- (11) 子どもがなにか失敗をしたとき同じ失敗を繰り返さないように厳しく注意する。 [ ]
- (12) 子どもが自分から進んでやった事はたとえ失敗してもよいと思う。 [ ]
- (13) 子どもがやり方がわからなくて困っている時はやり方を教える。 [ ]
- (14) 勉強でも運動でも子どもが積極的に取り組むように日頃から励ましている。 [ ]
- (15) 子どもが友達とケンカをしたときその訳を聞きどうすればよいかを細かく教える。 [ ]
- (16) 子どもが園でどんな様子なのかあんまり気にならない。 [ ]
- (17) 子どもの遊びや友達の話はほとんど気にしない。 [ ]
- (18) 子どもがいたずら書きをしているのを見つけたらきちんと注意をする。 [ ]
- (19) 子どもがその日の出来事を話す時は忙しくてもよく聞いてあげる。 [ ]
- (20) 子どもができそうもないことをやろうとしている時でも一応思うとおりにやらせてみる。 [ ]
- (21) よその子や兄弟と比べ悪い点や弱い点が気になる事が多い。 [ ]
- (22) 園に参観に行くと子どもの悪い面が目につき後で注意することが多い。 [ ]

資料2 子どもの性格・行動の質問紙

子どもの日頃の行動、様子について観察している部分について下記の33項目にあわせて答えてください。項目の内容にあてはまる場合は○印を、ときどきあてはまる場合は△印、あてはまらない場合は×印を [ ] 内に記入してください。

- (1) 何事によらず、自分中心になりたがる。 [ ]
- (2) ひどく自慢したり、持ち物を見せたがる。 [ ]
- (3) 変わったことや目立つことをやりたがる。 [ ]
- (4) 寝つきが悪く目を覚ましやすい。 [ ]
- (5) 運動会や遊戯会の前などひどく落ち着かなくなる。 [ ]
- (6) 食べ物の好き嫌いが激しい。 [ ]
- (7) 親や先生がいないと不安がる。 [ ]
- (8) 気が小さい。 [ ]
- (9) 暗いところや場所が変わるとひどく怖がる。 [ ]
- (10) 自分の思い通りにならないとかんしゃくをおこす。 [ ]
- (11) わがままで扱いにくい。 [ ]
- (12) 気分が変わりやすい。 [ ]
- (13) あと片づけができず、やりっぱなしにする。 [ ]
- (14) やることがおそく、ぐずぐずしている。 [ ]
- (15) 誰かに頼ろうとする気持ちが強い。 [ ]
- (16) 泣き虫でちょっとしたことでめそめそする。 [ ]
- (17) すぐふくれたり、すねたりする。 [ ]
- (18) 自分だけかわいがられようとする気持ちが強い。 [ ]
- (19) 自分の物を人が使おうとすると、ひどく腹をたてる。 [ ]
- (20) 怒ると機嫌がなおりにくい。 [ ]
- (21) けんかをして人にかみつくことがある。 [ ]
- (22) 初めての人になかなかなじめない。 [ ]
- (23) 内弁慶だが、外では引込思案になる。 [ ]
- (24) 指名されると答えるが、自分からは発言しない。 [ ]
- (25) 親や先生によく反抗する。 [ ]
- (26) 叱られることばかりする。 [ ]
- (27) 親や先生の顔をうかがう。 [ ]
- (28) どの先生にもあまりなじもうとしない。 [ ]
- (29) 登園時や給食になると腹痛をよく訴える。 [ ]
- (30) 乱暴したり勝手なことをよくして集団を乱す。 [ ]
- (31) おしっこがちかい。 [ ]
- (32) 顔色が青白い。 [ ]
- (33) 食欲が無い方である。 [ ]

資料3 養育体験幸福度チェックリスト

自分の4歳から8歳くらいまでのことを思い起こして次の各項目にあてはまるものに○をつけてください。

1. 自分の持っているもっとも古い記憶は、父や母と過ごした楽しい出来事であって、苦しい悲しいことではない。 [はい いいえ]
2. 幼稚園（保育園）、近所の集団体験はおもしろかった。当時の先生や友達の顔をなつかしく思い出すことができる。 [はい いいえ]
3. その当時の家にどんな品物がどこに置かれていたかをよく覚えている。 [はい いいえ]
4. 父と母は仲がよかった。少なくとも子どもの前で争ったことはない。 [はい いいえ]
5. 私の育った家庭は、生活にいつも追われていたのではなく、ある程度ゆとりがあった。 [はい いいえ]
6. 親は私が何か質問すると、うるさがらず、ていねいに、理解できるように答えてくれた。 [はい いいえ]
7. 父や母のことで友達からいじめられたことはない。 [はい いいえ]
8. 学校に行くのがとても楽しかった。病気のとき以外は休んだことがない。 [はい いいえ]
9. 父親は暇なときに、よく肩ぐるまに乗せてくれたり、すもうの相手になってくれた。父親のからだの感触を覚えている。 [はい いいえ]
10. きょうだいげんかをしたことはあるが、他のきょうだいに比べて自分が不公平に扱われたことはない。 [はい いいえ]
11. おもちゃは、単なる思いつきではなく、いろいろと考えてかってくれたようである。 [はい いいえ]
12. 父や母と一緒に大きな声で歌ったことがある。 [はい いいえ]
13. 父や母とハイキングに行ったり、泳ぎにいった思い出がある。 [はい いいえ]
14. 父や母は日本の昔話や民話をよく話してくれた。 [はい いいえ]
15. 自分が病気をしたときに親は心から心配してくれた。 [はい いいえ]
16. 母は、叱るときは厳しかったが、いつもはやさしい、温かい人柄で、その頃の笑い声や話し方をよく覚えている。 [はい いいえ]
17. 父や母は、お互いの悪口やぐちを子どもたちの前でいうことはなかった。 [はい いいえ]
18. 幼稚園から帰ると母は、たいてい家にいた。いないときも行先はわかっていた。 [はい いいえ]
19. 家にお客がきたり、こちらから出かけたりして、にぎやかで明るい家庭であった。 [はい いいえ]
20. 父や母に抱きついて甘えた記憶がある。 [はい いいえ]
21. 家族そろっての食事会が楽しかった。食事の時に叱られたことはなかった。 [はい いいえ]
22. 今度はどこへ行こうかと、何をしようかと親の方から意見を聞くことが多く、すべてを一方的に決めてしまうことがなかった。 [はい いいえ]
23. 親は私を誇りに思っていたようだ。 [はい いいえ]
24. 父が帰宅するとお帰りなさいと、とんで行った。当時の父を自分は大好きだった。 [はい いいえ]
25. 当時の母を好きだった。母がいないとさびしかった。 [はい いいえ]

(東萌保育専門学校専任教員 岩崎桂子)